みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Territorial Organization of Faleata : A Case Study of the Title System in Samoan Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 真鳥 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004440

ファレアタの地縁組織

——サモア社会における称号システムの事例研究——

山　本　真　鳥*

Territorial Organization of Faleata

——A Case Study of the Title System in Samoan Society——

Matori YAMAMOTO

In the general Polynesian political system chiefly titles are organized on a genealogical principle. All the titles in a polity are traced to the eldest line through kinship link and are ranked according to their genealogical distance to it; thus they are integrated into a pyramidal structure of political authority. But, although the Samoan political system is based on the chief system as are other Polynesian societies, its titles are not organized on the same principle. Rather, chiefly titles are integrated on territorial bases, in which each title is somehow related to others. In this regard the Samoan chief system is unique among Polynesian societies.

Territorial organization has been highly developed in Samoa, each territorial group having kept relative independence of its own. This paper examines, in detail a particular territorial group of a small district, Faleata, located on the north coast of Upolu Island, Western Samoa, in order to analyse the manner in which chiefly titles are organized in the Samoan chief system. First, the *fa'alupega*, or formal address, of Faleata is examined. Then the *fono*, or meeting of chiefly council of Faleata, in which decisions for the territorial group are made, is checked with respect to its seating arrangement of title holders, to its order of kava cup presentation, to its order of giving formal speeches, and finally to its information network. Then important titles are examined in regard to their genealogies, historical relationships, geographical locations and legitimacy for their representability.

* 法政大学，国立民族学博物館共同研究員

Detailed analysis of the complicated territorial organization of Faleata shows that, in Samoa, there is nothing like the single overarching principle observed in Tonga in integrating chiefly titles. Instead, inconsistent are the historical explanations which relate titles in order to make territorial integrations. Therefore, Samoan title system is more fragile and must be reaffirmed periodically on various occasions. Lack of centralization is the main feature of the Samoan political system. Dual opposition and interchangeable representation in the system are also discussed.

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. ファレアタの *fa'alupega*
Ⅲ. 地縁合議体
1) 会議場
2) 席　次
3) *fono* の式の進行
4) *fono* 召集権と連絡網
Ⅳ. *ali'i* たち
1) トゥアマサガの組織
2) ファレアタの *ali'i* たち
Ⅴ. *ali'i/tulafale* 関係
Ⅵ. *tulafale* たち
Ⅶ. おわりに

Ⅰ. はじめに

本稿[1]で試みようとしているのは，サモアの伝統的な政治制度の基本的な様相をひとつの具体的な地縁組織に着目して素描し，分析することである。サモアは，ポリネシア社会の例にもれず首長システムに立脚した社会であるが，首長称号の格づけについてポリネシア社会の中では異色のシステムをもつ。

他のほとんどのポリネシア社会において，首長称号の格づけは年長優位の原理と系譜の一元化により行なわれる。その最も良い例はサモアの南隣に位置するトンガで，Captain Cook がここを訪れた18世紀後半には，Tu'i Tonga という王の下，社会は年長優位の原理によりひとつの系譜に統合されていた。すなわち，Tangaloa 神の子の Ahoeitu が初代 Tu'i Tonga で，ほとんどは長男継承によりラインを辿ることができる。そして Tu'i Tonga の年少ライン，Tu'i Ha'atakalaua，さらにその年少ラ

1) この論考のもととなった調査は1978年6月～79年9月，80年2月，7月，81年5月～9月の間に行なわれた。最初及び最後の調査は各々，米国 East West Center と放送文化基金(財)の経済的援助によるものである。記して感謝を献げたい。また，この論考の一部は民族学博物館共同研究「ミクロネシアの民俗文化のエスノヒストリーの研究」の会合にて報告している。研究会メンバーの活発な御意見，御批判にも感謝したい。

インの Tu'i Kanokupolu のあわせて3つのラインを基幹として，他の首長称号はすべてそのいずれかのラインへ系譜を逆のぼることができる。つまりトンガの首長称号はその称号が発生した時の Tu'i Tonga からの系譜上の距離をはかることができるのである。すべての称号はこの系譜的距離によって格づけされ，かくしてピラミッド型のひとつの構造に統合されているのである [SAHLINS 1958: 139–151; MARCUS 1980]。

それに対してサモアでは，すべての称号の格づけの基準となるような中心的な称号は存在せず，サモアに中央集権は発達しなかった。サモア全土に名のきこえたいくつかの称号も存在するが，分権的原理が優先しているので，傍系として派生した称号がありながら必ずしもそれらの格づけの中心とはなっていない。すなわち，トンガのように中心的称号に対する系譜上の距離によって称号の格づけが行なわれるのではない。サモアの場合に重要なのは，相対的な自立性をもった分権的な地縁組織であり，その内で諸々の称号は互いに関係づけられ，固有な政治空間を形成するのである。

本論考の焦点は，そのような地縁組織内で，必ずしも起源を同じくしていない複数の称号同士がいかにして互いに結びつけられ，関係づけられているか，という問題に向けられている。ここではファレアタ (Faleata) という一地縁組織をとりあげ，記述，分析する過程でその問題を考察していこう。

そこでまず，サモアの首長称号と親族組織との関連，及び首長称号のカテゴリーと役割について，以下簡単に述べておく。

サモアの個々の首長称号名の母体となるのは，ひとつの村をベースとして祖先を共有する *'āiga*（親族集団）である。*'āiga* は村の中に宅地，耕地，そして単数ないし複数の *matai*（家長）の称号名をもつ。称号名は例えば Aiono とか Sua とかいうような固有の名で，*'āiga* の故事に由来し，代々 *'āiga* のメンバーにより受け継がれていくものである。実際に *'āiga* の土地に住み，宅地，耕地を利用して暮している人々は通常3～10世帯ほどであるが，性無視的 (cognatic) に系譜を辿り得る人は皆，土地や称号に関して幾分かの権利を主張できるので，潜在的なメンバーは相当数にのぼる。*'āiga* のうちで最高位の称号名を継承する人を選出する母体はそのような潜在的メンバーを含めた *'āiga* である。継承者は前任者の長男とは決まっておらず，その都度 *'āiga* の集会で全員一致で適任者を選び出すのであり，時には共通の祖先の血を受け継いでいない婚入者や養子が選ばれることすらある。*'āiga* 内の他の称号名に就く人は，この最高位 *matai* により適宜任命されることになる。

称号名を授与された人は *'āiga* の内では *matai* として，*'āiga* 経営にリーダーシッ

プをとることとなるが，対外的には *ali'i* か *tulafale* という政治的役割のいずれかひとつを担っている。*ali'i*/*tulafale* の区別は各々の称号名に定められてあるものだが，*ali'i* は首長としての威厳を一身に体現する役割であり，*tulafale* は *ali'i* の「家来，従者」として *ali'i* のかわりに儀礼的演説をしたり，食物を分配したり，メッセンジャーの役を果たすなど，様々な具体的仕事を引き受けるのである。*ali'i* が威厳を示すため何もせずに黙して座っているのに対し，*ali'i* の代理人である *tulafale* は表向きは *ali'i* の忠実な従者としてへり下っているが，実際には *tulafale* は *ali'i* の支配を抜け出し，政治活動の大きな部分を担うことにより，実権を掌中におさめている[2)]。またそればかりでなく，*ali'i* も *tulafale* も各々のカテゴリーの内で序列を形成しており，中には非常に位の高い *tulafale* がいる一方，自分のために演説してくれる *tulafale* ももてないような位の低い *ali'i* もいるのである。

かくしてサモアの地縁組織は，称号間の格式の差，*ali'i*/*tulafale* の別，各々の称号に固有の役割といった複雑な要素を含み構成された小宇宙となっている。地縁組織としてのファレアタを分析するにあたり，まず次節ではファレアタの *fa'alupega* という公式の呼びかけに現れる有力称号名を検討する。*fa'alupega* の中では重要な称号名がすべて唱えられなくてはならないが，称号の「重要性」とは地縁集団の統合レベルに応じて異なる相対的なものである。その点について考察するために，ファレアタの中のひとつの村トアムアの *fa'alupega* についても同様に検討を加える。

第Ⅲ章では，地縁集団の合議体が開催する会合——各称号名の保持者たちが集まる——を称号の序列を繰り返し強調するための儀礼としてとらえ，席次，演説，カヴァ杯の順位，そして情報伝達のための連絡網のうちにそれを探ってみる。

第Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ章では，前二章の検討をふまえ，さらにデータを加えつつ，ファレアタ内部の有力称号間の関係についての分析を行なう。そのために *ali'i* 相互の関係，*ali'i*/*tulafale* の対の関係，*tulafale* 相互の関係，の3つの分析軸をもうけて検討する。

この論考の中で以下に検討する情報は，サモアの伝統文化に通じたひとりの *tulafale* から得たものであるが，彼は To'afā と呼ばれるファレアタの有力 *tulafale* 団のうちの一称号に仕える *tulafale* である。サモアにおいては，とりわけ称号にかかわる情報

2) この *tulafale* の力は，*ali'i* の称号名同士が系譜という明確な証拠により序列化されているのではない，というサモア特有の称号システムの状況と無関係ではあるまい。というのはひとつの地縁組織の内で，各称号名，各称号群は，ともすれば不安定で，一貫性もなく，矛盾だらけの口頭伝承により媒介されているのだが，これらの伝承を管理し，公式の場での演説という行為を通じて，ほころびをつぎ合わせながら称号同士を結びつけるのは *tulafale* の仕事である。トンガにも同様に *eiki*（首長：サモアの *ali'i* と語源は同じ）の家来として仕える *matapule* という役があるが，これがトンガの政治活動の実権を握るということはかつてなかった。

はそれに直接関係のある人しか口にすることはできないし，集団及び集団内部の利害対立が激しいから，立場を超越して真理であるような，客観的な情報というものを得るのは難しい。従って筆者の得た情報もある意味では To'afā 寄りであるといえるだろう。将来ファレアタの他の称号保持者からも情報をとってみると，さらに意義深い研究が可能となるのは明らかである。しかしこの論考で行なっているのは，そうした情報の間のヴァージョンを研究する以前の段階において，それなりに首尾一貫していると思われるひと組の情報から，ともかくもひとつの組織体のなりたちを明らかにすることである。

Ⅱ．ファレアタの *fa'alupega*

fa'alupega とはひとつの地縁集団——地縁集団とはここでは地縁合議体 (*fono*) を共有する集団のことを指している。地縁合議体は最小の村 (*nu'u*) からサモア全土に至るまで様々のレベルで存在する——に対する形式を備えた呼びかけで，それぞれの地縁集団の重要な称号名ないし称号集団名がその内に含まれている。サモアでは，人や集団が出会った時には相手の称号名を唱えて挨拶をする習慣があるが，この行為を *fa'alupe* という。複数の称号に対し *fa'alupe* する時，相手方の序列をとり違えたり重要な称号名を抜かして礼を失することのないように，細心の注意を払う必要がある。そのために地縁集団に対する呼びかけは，常套句として人々の間に語り伝えられているが，これが *fa'alupega* である。有能な *tulafale* は皆，サモア各地の地縁集団の *fa'alupega* に習熟していなくてはならない。*fa'alupega* はこうして集団内部ばかりでなく外部によっても認定された，地縁集団が有する諸称号間の序列であるということもできよう。ファレアタの地縁組織を調べるにあたりまずこの *fa'alupega* から始めるのが適当であろう。

さてファレアタの *fa'alupega* を検討する前に，サモアの地縁組織の中でのファレアタの位置について一応述べておこう。サモア諸島第二の島ウポル (Upolu) 島[3] は，人口が集中し政治権力をめぐる争いの最も激しかったところである。伝統的には西からアアナ (A'ana)，トゥアマサガ (Tuamasaga)，アトゥア (Atua) の3つの地方に分かれているが，この論考の中心であるファレアタはトゥアマサガ地方の北岸中央に位置

3) 以下，地名，人名（主として称号名）が多出するが，煩雑さを少しでも避けるために，人名はローマ字表記，地名はカタカナ表記(ただし初出に際してはカッコ内にローマ字表記を付す)とする。

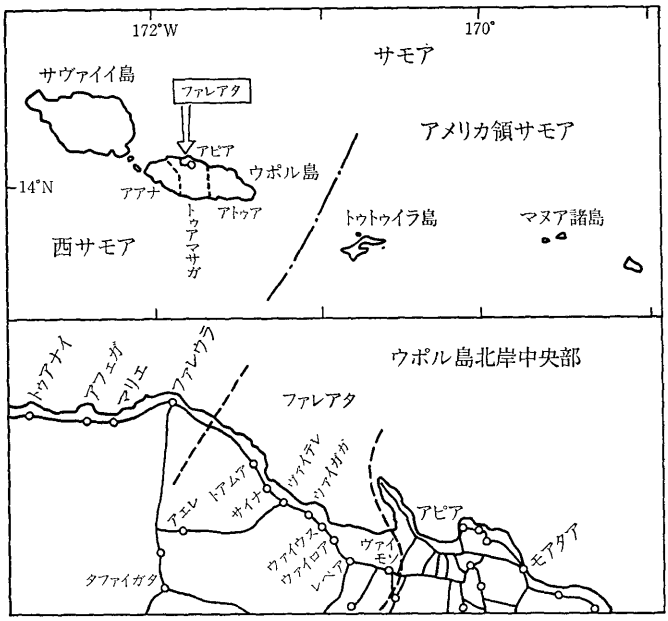

図1　サモア及びウポル島北岸中央部

する小地方である（図1「サモア及びウポル島北岸中央部」参照)。海沿いの道約6.6 km に人家は集中しているが，耕地は山の斜面を南へと広がっている。首都アピア (Apia) に近いため最近の人口集中が著しく，1976年現在約1万5300人[4] が住んでいる。ファレアタは8つの村 (*nu'u*) に分かれており，それらは東から順に，ヴァイモソ (Vaimoso)，レペア (Lepea)，ヴァイロア (Vailoa)，ヴァイウス (Vaiusu)，ヴァイガガ (Vaigaga)，ヴァイテレ (Vaitele)，サイナ (Saina)，トアムア (Toamua) である。原則として村は，ひとつの自治体として，称号保持者で構成される地縁合議体 (*fono*) を有する最小単位であるが，あまりに人口の多い村ともなるとさらにいくつかの小村 (*pitonu'u*) に分かれて，各々の小村が細かいことを決定する地縁合議体を構成し，村のそれは大事なことを決める時に集まるだけという場合もある。すなわち人口増加に伴い，村が機能しにくくなりやがて分裂していくという過程が成立しているようにみえる。ファレアタに関しても，もとは村であったのがこの過程を経て村の連合体である小地方になったということが推測できる。けれどもファレアタが村であると

4) 都市化現象に伴い，アピアで職をもつ人々が構成する非伝統的コミュニティが行政区としてのファレアタにも多く形成されている。この国勢調査にはそうした村々も含まれているので，伝統的村に属するのは実際にはこの半分以下であろう。一方，ファレアタ以外のところ（アピア，外国の他，他村も含めて）に住みながらファレアタの称号をもつ人々もおり，何かあると彼らはファレアタまでやってきて行事に参加する。

いう意識はもはや人々の間にはない。ファレアタは強いていえば，*itūmālō* というカテゴリーに入っている。*itūmālō* とは国 (*mālō*) の部分 (*itū*) という意味であるが，この語は村を超えた地縁組織にはすべてあてはめることができる。すなわちトゥアマサガのような大きなものにも，またその一部であるようなファレアタにも用いることのできる，大きさに関しては極めてルーズな語である。人々はむしろ，ファレアタやトゥアマサガという固有名詞のみを，地名及び地縁組織をさす語として通常，用いている。

さてそれではいよいよファレアタの *fa'alupega* について検討しよう。

ファレアタの *fa'alupega*

1 Afio mai Tapa'au,
2 　lau afioga Faumuinā o le tupufia.
3 Susu mai Matai'a o le tama a le fale.
4 Susu mai Seiuli o le alo o Malietoa.
5 Maliu mai lo outou To'afā ma lau fetalaiga Va'aulu.
6 Maliu mai le Saofa'iga,
7 　ma le Fa'apito Saofa'iga.
8 Maliu mai le Pulelua ma le Faigā.
9 Maliu mai le Nofoapule.
10 Maliu mai Lauati ma Motuopua'a.
11 Maliu mai Pua'asegisegi ma Pua'alatamai,
12 　ma le lautī ma laulelei.
13 Ia te 'oe Faleata.

（日本語訳）

1 ファレアタの最高位称号よ，ようこそ，
2 　王者，Faumuinā よ。
3 ファレアタの王子，Matai'a よ。
4 Malietoa の息子，Seiuli よ。
5 あなた方 To'afā，そして *tulafale* の Va'aulu よ。
6 Saofa'iga,
7 　そして Fa'apito Saofa'iga よ。
8 Pulelua と Faigā よ。
9 Nofoapule よ。
10 Lauati と Motuopua'a よ。
11 Pua'asegisegi と Pua'alatamai よ，
12 　そしてその他諸々の称号よ。
13 あなた方ファレアタの *tulafale* たちよ。

各行のはじめに出てくる Afio mai, Susu mai, Maliu mai はいずれも,「ようこそ」「いらっしゃいませ」の意味の敬語であるが, *fa'alupega* 中では単に主人側から来客側に対する呼びかけとしてばかりではなく，来客側から主人側に対する挨拶としても同じく用いられる。前二者は *ali'i* に対しての，後者は *tulafale* に対しての呼びかけである[5]。最初の4行はファレアタの三大 *ali'i* に対する呼びかけで，1行目で3人全員に対して呼びかけた後，Faumuinā, Matai'a, Seiuli, と個別に呼びかけていく。Faimuinā はレペア村の最高位称号である。

Matai'a の称号については少々詳しい説明を要するだろう。この称号名は最高位 *ali'i* としてファレアタに2つ，ひとつはヴァイモソ村，もうひとつはヴァイテレ村に存在する。もとはひとりの Matai'a として出発したのだが，ある時期に2人が同時にこの称号名を授かり，以後2人に定着し，互いに独立の称号となってしまってこのような事態に陥ったと考えることができる。称号のみならず Matai'a 選出の母体として親族集団も2つに分裂し，それにあわせて土地も分割している。こうした現象――ここでは称号分裂と呼ぶことにする――は称号システムの発達したポリネシアの中でもサモア特有のもので，他の称号システムにはあまり見られない。*'āiga* の拡大に伴って1人の *matai* のリーダーシップの下には連帯がはかりにくくなる，というのがその主たる原因と考えられる。こうした複数の同名称号保持者は，対外的な場面では，誰でもよいがそのうちの1人だけが *'āiga* の代表者となることができる。

Seiuli はヴァイウス村に属している。Malietoa とはファレアタを含めた上位区分であるトゥアマサガ地方全体を象徴する最も位の高い称号である。初代の Seiuli は，Malietoa 称号のある保持者の息子であったことが知られ，それゆえにこの称号は「Malietoa の息子」と呼びかけられる名誉を誇っている。

5行目以下は，この3人の *ali'i* に付き従う *tulafale* たちである。まず5行目の最初に来るのは To'afā（4人の意）で，その名の通り4つの *tulafale* 称号から成る *tulafale* 団である。それらは最も東に位置するヴァイモソ村の Manuleleua と Une, そして最西端のトアムア村の Ale と Ulu であるが，5番目の Va'aulu は，トアムア村で Ale, Ulu に続くナンバー・スリーの *tulafale* で，時として To'afā に付随する称号として登場する[6]。Saofa'iga は，レペア村の高位 *ali'i*, Faumuinā に仕える *tulafale* 団であり，その内には多くの *tulafale* を含むが，A'i と Vaitagutu という2つの称号の各保持者がそのリーダーを務める。また7行目の Fa'apito Saofa'iga はここではヴァイウス村で Seiuli に仕える Ulugia とその配下の *tulafale* たち (Sā Ulugiā:

5) サモア語の敬語語彙は，*ali'i* に対するものと *tulafale* に対するものと異なる場合が多い。
6) To'afā と Va'aulu をあわせて Falelima（五家）ということもある。

Ulugia 一家)を指している。但しこの *tulafale* 団の名は広義に用いられた時には，ヴァイモソ村，トアムア村(両方ともに To'afā のいる村)およびレペア村(Saofa'iga のいる村)を除く村々の *tulafale* たちを一括していう。8行目以下には，Ulugia を除いた，広義の Fa'apito Saofa'iga を列挙してある。8行目はヴァイロア村の *tulafale* のことであり，Pulelua とは Nu'u, Atinu'u を指している。9行目の Nofoapule とはヴァイテレ村の Toī, Tūlaga, ならびに Pula を指す。10行目はサイナ村，11行目はヴァイガガ村の *tulafale* たちである。12行目に登場する *lautī* と *laulelei* とは，*fa'alupega* にわざわざ名の出ることはないような，雑用をこなす位の低い無名の *tulafale* たちのことである。13行目のファレアタとは地名であるが，ここでは地名そのものではなく，ファレアタを代表する *tulafale* のことをさしている。ファレアタを代表できるのは誰か，という問題は後に詳しく検討したいが，ここではファレアタとは地名であると共に *fono* でもあり，代表者でもあるということに注意を喚起しておこう。

以上のようなファレアタの *fa'alupega* に登場する称号群を整理したのが表1である。ファレアタの最高位は，Faumuinā, Matai'a, Seiuli の3つの *ali'i* 称号であり，これに多くの *tulafale* 団が付き従っているが，その中でも代表的なのは To'afā, Saofa'iga, 狭義の Fa'apito Saofa'iga (Ulugia 一家) の3グループである。これら称号名各々の役割や格の相違については次章以下において考察していこう。但しその前にファレアタを構成する一部分であるところの村の *fa'alupega* に簡単に触れ，ファレアタの一部分と全体の関係をみておきたい。

ファレアタはウポル島北岸に位置する8つの村から成っているが，これらは各々独立した自治体であり自らの地縁合議体としての *fono* をもち，同時に各々の *fa'alupega*

表1　ファレアタの代表的称号

	村	称号	
		ali'i	*tulafale*
東	ヴァイモソ	**Matai'a**	Manuleleu'a, Une [**To'afā** の2人]
↑	レペア	**Faumuinā**	**Saofa'iga**
	ヴァイロア		Pulelua (Nu'u, Atinu'u), Faigā
	ヴァイウス	**Seiuli**	**Fa'apito Saofa'iga** (Ulugia)
	ヴァイガガ		Pua'asegisegi, Pua'alatamai
	ヴァイテレ	**Matai'a**	Nofoapule (Toī, Tūlaga, Pula)
	サイナ		Motuopua'a, Lauati
↓ 西	トアムア		Ale, Ulu [**To'afā** の2人], Va'aulu

をもつ。ここで例としてとりあげるのは，4つの小村から成り計1300人（1976年）の人口を擁するトアムア村である。

トアムア村の *fa'alupega*

1 Maliu mai lo lua To'alua, Ale ma Ulu,
2 ma lau fetalaiga Va'aulu.
3 Susu mai le Gafa o Ātoe,
4 ma le Itūlua Sā Tunumafono.

（日本語訳）

1 あなた方 To'alua（2人），Ale と Ulu よ，
2 そして *tulafale* の Va'aulu よ。
3 Ātoe の *ali'i* たちよ，
4 そして Tunumafono 家の分家の人々よ，ようこそ。

トアムア村はファレアタの代表的な *tulafale* 団，To'afā のうちの Ale と Ulu の村である。この村では *tulafale* が最上位を占めており，同じような村はファレアタでは他にヴァイロア，ヴァイガガ，サイナがあるが，サモア全土でみるとこのような村はむしろ数が少ない。トアムア村は東より順番に，トアムア (Toamua) 小村，ウソアリイ (Usoali'i) 小村，サフネ (Safune) 小村，プイパア (Puipa'a) 小村の4つの小村に分かれている。東端のトアムア小村は Ale とその *'āiga* によって成り立っており，同様にプイパア小村は Ulu とその *'āiga* の村である。Ale も Ulu も数多くの *tulafale* 称号を配下にもつ。Ale の配下の *tulafale* たちは Inailaunao'o, Ulu の配下の *tulafale* たちは Aogāmalie と総称される。

ファレアタの三大 *ali'i* 称号のひとつ Matai'a が2つに分裂していたようにトアムア村の Ale と Ulu の称号も各々2つと4つに分かれ，それぞれが *'āiga* の分枝をひとつずつ率いている。これらの称号保持者たちは実際にはその分枝のリーダーシップをとるにすぎないが，にもかかわらず，対外的にはひとりで *'āiga* 全体を代表する存在である。保持者のいずれかひとりだけが *fono* に出席している時，彼は彼の分枝のみならず *'āiga* 全体を代表する存在とみなされる。つまり，分裂した称号間に上下関係はなく，しかも各々の称号は *'āiga* を代表することにおいて置換可能な相似物となっているのである。しかし，各称号保持者が複数出席した時には，ひとつの称号に人が複数，という矛盾がおきることになる。このような時には，適宜順番にひとりが称号に定められた役を行ない，他は *malolō*（お休み）して矛盾を避けることが多い。ただ

fa'alupega は，Ale が2人出席していれば，"Ale ma Ale" (Ale と Ale), Ulu が3人出席していれば，"Ulu ma Ulu ma Ulu" (Ulu と Ulu と Ulu) というように場合に応じて修正して用いている。複数の Ale と Ulu の各々に配下の *tulafale* がいるので，Inailaunao'o が2組，Aogāmalie は4組存在することになる。

ファレアタの *fa'alupega* にも登場した Va'aulu はトアムア村の東西に拮抗する形で存在するトアムア小村とプイパア小村の間のサフネ小村にいて，ナンバー・スリーの地位に甘んじている。Ale と Ulu の次に付け足しとして出てくることが多いので，サモア全土にも名は知られているが，前二者と異なり配下の *tulafale* をもつということがない。

トアムア村は Ale と Ulu をはじめとする *tulafale* たちが勢力をもつ村であるが，ここにも *ali'i* が全く存在しないというのではない。重要性は低く名前も有名ではないが，若干の *ali'i* 称号が主としてウソアリイ小村，サフネ小村にいる。Gafa o Ātoe (Ātoe の *ali'i* たち) はサフネ小村の Pepe, Fānene, Fa'aitu の3称号を指し，le Itūlua Sā Tunumafono (Tunumafono 家の分家) には4つの *ali'i* 称号と数多くの *tulafale* 称号が含まれるが，このうちの Aumuagaolo, Palusālue, Manu'a の3つの *ali'i* 称号を代表として指す。Tunumafono 家は，同じトゥアマサガ地方の南岸サファタ (Safata) で大きな勢力をもつ *'āiga* であるが，この一部が内輪もめをおこしてトアムア村の Ale のもとに庇護を求めてきたのが，ウソアリイ小村の Tunumafono 家の由来であるという。したがってトアムア村のこの部分は，コンテクストに応じて独立の *'āiga* と考えられたり，また時には Ale の配下と考えられたりして一定していない。

以上のようにトアムア村にも数多くの称号が存在してはいるものの，すべてが *fa'alupega* に登場するわけではない。村の4つの部分を代表する称号や称号群の名を呼びあげて村全体をつくすといっても，コンテクストに応じてそれは異なってくる。3行目と4行目の Gafa o Ātoe や le Itūlua Sā Tunumafono はトアムア村だけの *fa'alupega* には登場してくるが，ファレアタ全体となるとオミットされ，トアムア全体は To'alua (「2人」の意。Ale と Ulu を指す) だけ，ないしはそれと Va'aulu だけによって代表されることが可能となるのである。

Ⅲ. 地縁合議体

地縁集団は自らにかかわる問題を話し合うための合議体，*fono* をもつ。サモアの意思決定は高位の者により単独でなされることはなく，必ず *fono* という合議体を通じ

て全員一致で行なわれなくてはならない。そこには，高位の者が威信をもってはいても，必ずしも権力を握る者とはなっていないサモアの政治状況をうかがうことができる。しかしここでは *fono* のそうした決定機構としての重要性はさておき，*fono* の儀礼的側面に着目してみたい。すなわち席次，発言順位，カヴァ[7] 儀礼等において，地縁集団内の称号間の関係を絶えず確認するメカニズムが存在するが，その実際をファレアタに即して検討しよう。

fono は村—(小地方)—地方といった地縁集団のレベルごとに形成されており，前章の *fa'alupega* と同様，ファレアタの *fono* はその中間レベルに存在する。

1) 会　議　場

地縁集団は各々 *fono* を開催するための *malae*(広場) をもつ。村のように下位の集団では広場をひとつしかもたないことも多いが，地方のように上位ともなると2つの広場をもつのが常である。2つの広場は別々の機能があって，一方は *malaefono filemū* (静かな会議場)，または *malaefono manino* (澄んだ会議場) と呼ばれて平和を目的とした会合に用いられ，もう一方の *malaefono o le 'a'ava* (戦争の会議場) は戦争を目的とした会合に用いられる。ファレアタの場合，高位 *ali'i*, Faumuinā のいるレペア村にはレペアと呼ばれる *malaefono filemū* が，またヴァイロア村にはヴァイタグトゥ (Vaitagutu) と呼ばれる *malaefono o le 'a'ava* が各々存在する。今日でもレペアは会議場として健在である。首都アピアより西方面行きのバスに乗ると，5分ほどで芝をきれいに刈り込んだ，円形に家の建ち並ぶ直径2～300メートルの広場のまん中を通り抜けるが，ここがレペアである。その家の配置ゆえに初めてサモアを訪れる人にはとても印象深い景色である。*malaefono o le 'a'ava* のヴァイタグトゥは，宣教師や植民地政府に戦争が禁じられて久しいためか，ファレアタの住民でも伝統文化によほど通じた人でなければ知らないほどに忘れられ，今や草深いやぶ地と化している。

2) 席　　次

村の *fono* であれば広場に建っている伝統的な楕円形の一軒の家の中で行なわれるのが常である。しかし地方の *fono* の場合には，その普通の方式の他に，いくつかの下位地縁集団に分かれて別々の家の中に着席し，代表者が家々の間の広場に立って野

7) カヴァ (サモア語では *'ava*) はポリネシア一帯に拡がる儀礼的飲料。コショウ科に属する灌木 *piper methysticum* の根をくだいて水にひたし，その上澄みを飲む。*fono* に際しては必ずカヴァを飲むが，その時には難しい作法があり，カヴァ杯を配る順位が定められている。

外で演説を行なう，という方式もある。これは *fono tauati* と呼ばれ，重要な議題と認定されたものについて行なわれる。ファレアタの野外 *fono* は本来ならば戦争の会議場であるヴァイタグトゥで開かれるものである。

まず一軒の家の中で会合が催される場合[8] から記述していこう。サモアの楕円形の家は長軸が道に沿っており，道に近い方が正面，反対が裏手となっている。楕円の円形部分は *tala* と呼ばれる。両方の *tala* 及び正面が位の高い人々の席で，*ali'i* は *tala* に *tulafale* は正面に，柱を一本ずつ背にして座る。他の位の低い人々は裏手にかたまって座る。この形式は別に *fono* に限らず，単に家族が家の中で集う時にも，主人となる *matai*（家長）夫婦は一方の *tala* に，主客はその反対の *tala* に，その他の位の高い人は正面に，若い人々は裏手にという具合に座るのである。

ファレアタの *fono* の席次は図2に示してある。*tala* に座ることができるのは Faumuinā, Matai'a, Seiuli の3人であるが，Faumuinā と Matai'a が向かい合うように座る。Matai'a の称号保持者はヴァイモソ村とヴァイテレ村にひとりずつ計2人いるが，*tala* に座れるのはそのうちのひとりだけで，もうひとりは裏手に座る。Seiuli はどちらの *tala* でもかまわない。正面はちょうど半分のところで分け，Matai'a の側に To'afā と Va'aulu が座る。もう片方は Saofa'iga の数多くの *tulafale* たちを

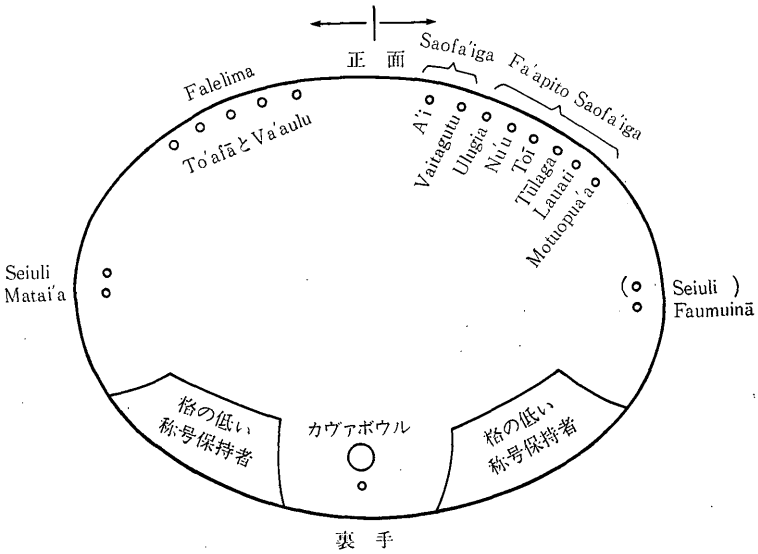

図2　ファレアタの *fono* の席次

8) 家の中で行なわれるとはいえ，サモアの伝統的な家屋は柱と屋根だけで壁がないので，外からもこの会議を見ることは可能である。

代表して A'i と Vaitagutu の2人が，そして Ulugia を頭とする広義の Fa'apito Saofa'iga の *tulafale* たちがひかえる。称号分裂を生じている称号名の場合は，その保持者のうちひとりが代表で正面に座る。他の称号はすべて，多い時は2列になって裏手の下座にひかえる。裏の中央にはカヴァボウルが置かれ，正式の場合には *tāupou*[9] がカヴァをつくるためにその前に座る。

一方野外 *fono* の場合の席次は以下のようになる。3軒の家が用意される。1軒にはヴァイモソ村の Manuleleua と Une 以下諸々の称号（但し Matai'a は除く）が着席する。2軒目にはトアムア村の Ale, Ulu, Va'aulu 以下諸々の称号。最後の家にはファレアタの最高位 *ali'i*, Faumuinā, Matai'a, Seiuli の3称号と Saofa'iga 及び広義の Fa'apito Saofa'iga の *tulafale* たちである。つまりファレアタ全員が1軒の家に座る時の形式から To'afā と Va'aulu が抜けて，各々自分たちの村の *fono* とほぼ同じように座る，という形式になっている[10]。

ここで興味深い点を拾っておこう。まず *ali'i* の席次について，Seiuli の席が固定していないのに対して，Faumuinā と Matai'a が向き合って座るのは，この2人が互いに拮抗する二大称号で，Seiuli はそれよりやや低く見られている，といえそうに思える。しかし見方によっては以下のように考えることも可能であろう。村の *fono* の席次であれば高位称号は2つ以下であるのが普通であるから，*tala* におさまるが，これが3つあるファレアタの *fono* ではひとつの称号の保持者がひとつの *tala* を占めるというわけにはいかない。だから Seiuli がどちらも占めることができるとして，うまくやりくりをつけているのである，と。この3称号の関係についてはさらに次節以下で検討していこう。

次に *tulafale* の席次について。席次で見る限り，To'afā はファレアタで最も有力な *tulafale* の如くである。一軒の家の中で行なわれる時の *fono* では Saofa'iga と Fa'apito Saofa'iga の双方の合体した部分と対峙しているのだし，野外 *fono* の際には，他のすべての称号が一軒にひしめいている時にそれに対峙し，しかも二軒に分かれて悠々座るのであるから。しかし席次からだけでは検討が不充分であることは，追い追い明らかとなろう。

ali'i と *tulafale* の対の関係は絶対的なものではなく，コンテクストに応じて他の称

9) 高位 *ali'i* に付属する「娘」格の称号。*ali'i* の親族の未婚の女性がこれに就く。地縁集団の女性的なもののシンボルとされ，公式な席での接待役を務める。儀礼でカヴァをつくるのは本来は *tāupou* の役目である。政治権力とは無関係であるが，高い敬意が払われる。

10) この時そのままであれば，正面の半分が To'afā が抜けたまま空席になってしまう。インフォーマントにはたずねそびれてしまったが，おそらくは Saofa'iga と Fa'apito Saofa'iga が To'afā の抜けた部分にも広がっていくのだろう。

号とも結びつき得るが，一応ファレアタの有力称号間では，同じ村に属する同士，Saofa'iga は Faumuinā（共にレペア村）に，Sā Ulugiā(狭義の Fa'apito Saofa'iga) は Seiuli（共にヴァイウス村）に，Une, Manuleleua は Matai'a（共にヴァイモソ村）に仕えるといわれる。この時 To'afā のうち同じ村に有力 *ali'i* のいない Ale と Ulu は直接の主人をもたないことになっているが，しかしここで考察した一軒の家の *fono* で見ると，Une, Manulaleua と共に Matai'a の側の *tulafale* 席に座るのであり，To'afā 全体が何らかの形で Matai'a 称号に結びついていると考えることができそうである。一方，野外 *fono* となると To'afā は Une と Manuleleua でさえ Matai'a とは別の家に分かれて座るのだから，Matai'a/To'afā の関係は他の2組の *ali'i*/*tulafale* 関係とは大分異なる結びつきのようにも思える。

3）*fono* の式の進行

まず一軒の家の中で行なわれる *fono* の式の進行をみてみよう。*fono* は形式の整った独特の演説（*lauga*）とともに開始する。最初の演説を行なうのは高位 *tulafale* のたいへん名誉ある仕事であり，これを誰が行なうかは演説に先だつ *fa'atau*（交渉）という話し合いを通じて決められることになっている。地縁集団によっては，慣例により誰が演説をするか予め決まっている場合もあり，またほぼ順位の等しい *tulafale* たちの間でその都度決められる場合もあるが，どちらの場合でも *fono* の最初の手続きとしてけっこう長い時間をかけて必ず *fa'atau* が行なわれる。ファレアタの場合，最初の演説は Saofa'iga のリーダーである A'i か Vaitagutu のどちらかが行なうことになっている。村の *fono* であれば，最初の演説の後すぐにカヴァが開始されることも多いが，それより大きい地縁集団の *fono* ではさらにいくつかの演説が続く。ファレアタでは To'afā がひとりずつ演説を行なう。4人のうち，最初は Aleで，Manuleleua, Ulu, Une と続く。

Une の演説が終わるのを合図に，議場の称号保持者たちはいっせいに手を打ちならし，カヴァが開始される。カヴァ杯を配る順位を以下に示そう。

ファレアタのカヴァ杯の順位

1 } Faumuinā
2 } Matai'a
3　演説をした Saofa'iga（A'i または Vaitagutu）
4　Ale
5　Manuleleua

6　Ulu
7　Une
8　もうひとりの Saofa'iga (Vaitagutu または A'i)
9　Nu'u
10　Ulugia
11, 12　Toī, Tūlaga
13, 14　Lauati, Motuopua'a
15, 16　Pua'asegisegi, Pua'alatamai
17　Va'aulu
18　Seiuli

この中で高位 *ali'i* の3人のうち Faumuinā と Matai'a の2人は1番目と2番目のどちらかに配られ，この順位は固定していない。また Seiuli は最後である。カヴァ杯の順位は一応，称号の序列に従っているが，最後の一杯に限っては1番目と同じく名誉ある杯で高位 *ali'i* に与えられる。サモアではしばしば称号間の序列が微妙なところでは曖昧で，高位二者または三者が同格であったり互いに順位を競い合っていることが多いし，かつそうした状況下では，「最後の一杯に最初と同じ位名誉がある」という考え方は，決定的衝突を避けるための見事な工夫であるといえよう。ここでは Faumuinā, Matai'a, Seiuli の三者がほぼ同格であることがうまく示されている。

カヴァ儀礼が終わると軽食が運ばれる。これは *fono o le ava* と呼ばれる。かつては *fā'ausi*（タロイモのポイ）や *taufolo*（パンの実のポイ）などであったが，今日ではビスケットとバタつきパンと紅茶である。

軽食の次はいよいよ議題にはいる。ここからは，先の *fono* のはじまりの時の演説ほどに順位にこだわらず，比較的自由に討論することができる。*ali'i* も発言してかまわないし，*tulafale* も高位 *ali'i* の意見に反対することができる。個々の発言は先のものより簡略化されているものの演説の形式をとっており，我々の社会の討論の場での発言に比べればかなり長いものである。しかし裏手の方に座っている位の低い称号保持者たちは討論に参加することができない。*fono* の討論において誰がどのような意見を述べるかは前もって予想のついていることも多い。というのも，発言の内容は称号保持者個人の考えによるというよりは，称号名同士の関係から決まってくるものであるし，また称号名にはじめから特定の発言内容が定められている場合もある[11)]。

このサモア式討論はそれ自体興味深いテーマであるが，ここで詳細に触れることは避けよう。端的にいえば，あるできごとによって乱れてしまった共同体の秩序を話し合いを通して確認し合うことが重要であり，問題解決というよりははるかに，伝統的な首長称号間の権力秩序維持に向けられている。

全員一致にもっていけた時もいけない時も，最後の演説は To'afā のひとりが行なう。調整，調停は To'afā の役割であるからだ。これに対して Saofa'iga が最初の演説をするのは問題提起役であるともいえよう。

野外 *fono* の場合の演説は，戸外に立ち *tulafale* のシンボルである杖 (*to'oto'o*) とハエ追い (*fue*)[12] を持って普通の *fono* の時と同じ順序で行なう。*tulafale* の演説は戸外で行なう方が本式のやり方で，より威厳 (*mamalu*) のあるものとされる。Saofa'iga のいる家の中で手をうちならすのを合図に，各家で別々にカヴァの儀式が行なわれる。この方式の *fono* の時，発言は戸外で行なわれなければならず，また *ali'i* が外で演説することは普通にはないので，*ali'i* の意見は *tulafale* が代弁する形式をとることになる。

ここでは To'afā と Saofa'iga という2つの *tulafale* 団の間の関係に注意を払っておく必要がある。最初の儀礼的演説が *tulafale* の最も栄誉ある仕事であることは先に触れたが，これは Saofa'iga が独占している。またカヴァ杯も Saofa'iga が *tulafale* としては最初に受ける。一方 Saofa'iga は実際にはそのうちのひとりしか名誉にあずかれないのに対して，To'afā は2番目以降ではありながら4称号すべてが演説もカヴァも行なう，という点において，また違った扱いを受けているといえるだろう。この To'afā と Saofa'iga の関係については第Ⅵ章で詳細に検討しよう。

4) *fono* 召集権と連絡網

fono については一応検討を終えたが，*fono* を開催するに到る過程についてここで手短かに触れておこう。*sāvali* というのは公式のメッセージを運ぶ人のことであるが，地縁集団には特定の称号名にこの役割が定められていることが多い。ファレアタの場合にはヴァイウス村の *tulafale*, Ulugia がこの役を務める。

---

11) 例えばアアナ地方の首村 (*tumua*) であるレウルモエガ村の To'aiva という *tulafale* 団は，叱責の演説を行なう役割をもち，一方同じ村の Alipia という *tulafale* は To'aiva に叱責を受けた人の誤ちを許す演説を行なうことができる。

12) 杖と共に *tulafale* のシンボルとして野外での演説の際に持つ儀礼的もちもの。50センチメートル程度の棒の上端にはヤシロープの房がついていて，演説を始める前にお祓いの如くに振る動作から英語で fly whisk（ハエ追い）と呼ばれるが，実際にハエを追う道具として用いられることはない。

sāvali が出るのは *fono* の開催に限らず，重要な称号の保持者が亡くなったりした時も同様である。例えば Faumuinā が亡くなったとすると，その親族集団から Saofa'iga に知らせがいき，Saofa'iga は Matai'a と Ulugia に知らせる。そうして Ulugia はファレアタを西へ東へと駆けずりまわってあちこちに知らせることになる。トアムア村，ヴァイモソ村では各々，Ale と Manuleleua に知らせると，それぞれ Ulu と Une に各々の *sāvali* を出すので，Ulugia は Ulu, Une に知らせる必要はない。この連絡網は図3に示した。ファレアタの重要な称号が Ulugia を中心に見事に対称的に構造化されている。ここでひとつ不可思議なのは To'afā の位置である。西の Ale と Ulu の場合はともかくとして，Manuleleua と Une のペアが同じ村の Matai'a に知らせる役割をもたないことである。かわりに Matai'a は Saofa'iga から知らせを受ける。これは席次のところで検討した主従関係からみても奇妙である。

さて *fono* 開催で重要なのは Ulugia に情報を流すことのできる称号とできない称号，つまりは召集権や提案権をもつ称号ともたない称号があることである。まず三大 *ali'i*, Faumuina, Matai'a, Seiuli は単独で *fono* を召集することができる。前二者はまず Saofa'iga を呼び，これを使いとして Ulugia に知らせる。Seiuli は直接配下の *tulafale* である Ulugia に *fono* 召集を命ずればよい。*tulafale* の中では To'afā, Saofa'iga の2グループは，開催を提案することができる。To'afā の場合，手続きとしては，トアムア村の Ale と Ulu の2称号，ヴァイモソ村の Manuleleua と Une の2称号の2組に分かれる。どちらの組も互いの間で相談して *fono* 開催が必要であるという結論に達すると，まず Saofa'iga に連絡する。さらに Saofa'iga は Faumuinā にお伺いをたてる。To'afā が *fono* 開催を提案すると Faumuinā も Saofa'iga も普通それに反対したりはしない。Saofa'iga 自身も *fono* 開催を提案することができる。

ここで興味深いのが *fono* 召集権が別々に三大 *ali'i* にあることで，どの *ali'i* が召集しても全員が *fono* に集まるということである。その意味では三者の権利は相等し

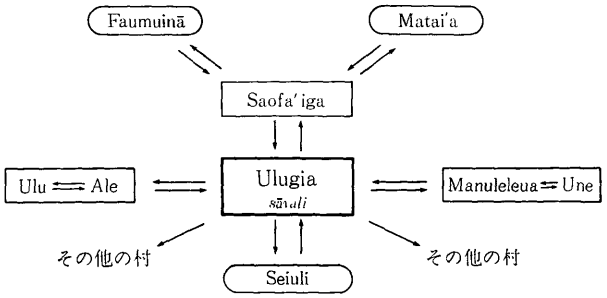

図3　ファレアタの連絡網

く，しかも，ひとつの権力を分け合うのではなく，互いに互換性をもつ相似的な地位にあるということがいえるだろう。しかし *fono* を開催するのは Faumuinā の村レペアにおいてであるし，また To'afā や Saofa'iga が開催を提案した時に最終決定を下すのが Faumuinā であるということから，三者の中では Faumuinā がやや特権的な立場にあるといえないわけではない。

さて，本章においては，*fono* の中で各称号がいかなる位置を占め，いかなる役割を果たしているかを詳細に検討したが，その成果をここでまとめておく必要があろう。非常に大まかには，*fa'alupega* 中に現れた称号の構造がここでも繰り返されているということができる。同じ三大 *ali'i* 称号 (Faumuinā, Matai'a, Seiuli) と三大 *tulafale* 団 (Saofa'iga, Fa'apito Saofa'iga, To'afā) がここでも重視され，それらに高い敬意が払われ，あるいは重要な役割が委ねられている。しかし委細な部分に目を向けてみると，それらの称号間の関係は非常に複雑に込み入っているし，そこに矛盾を見出すこともできる。まず *ali'i* 相互，次に *ali'i*/*tulafale* の間の関係も含め，*tulafale* 相互の関係について，これまでの概略をまとめておこう。

3つの *ali'i* 称号に関して，Faumuinā は議場となる *malaefono* が自分の村であること，また To'afā の *fono* 開催提案権に対しての決裁を行なうなど，三者の中で最も勢力をもっているように見える。実際今日の Faumuinā は，内陸に広大な土地を領有してそれを国営の農業公社に賃貸しているために金持ちであり，かつての称号保持者が二束三文で白人に土地を売ってしまったヴァイテレ村の Matai'a[13] など，住む土地すら現所有者に借りている位であるから，一見これら称号名の間には格の差までありそうに思える。しかし3つの称号は形式上は等しく位置づけられており，平等であることを示す様々の工夫がなされている。例えばカヴァ分配は，どうしても順番に配らざるを得ない性格の儀礼であるにもかかわらず，その中で同格であることを示すべくうまく構成されているといってよい。

これに対して，3つの *tulafale* 団はどうだろうか。ただ座っているだけの *ali'i* と異なり，*tulafale* の間には細かな役割の区別があり，それと関連してその間に格の差もありそうに思える。Fa'apito Saofa'iga は Fa'apito が「次」とか「準」とかいう意味であるから，Saofa'iga の次，ないし準 Saofa'iga であり，Saofa'iga に次ぐものと考えることができる。実際 Ulugia という称号名に定められた *sāvali*（メッセン

13) 植民地時代を経て独立した現在，その土地は農業公社所有のプランテーションとなっている。道路に面したゆるやかな斜面の部分は，政府の手で開発されつつある「工業地帯」となっている。

ジャー）の役割は，重要ではあるが格の高いものではないし，*fono* の最初の演説は行なわない上にカヴァ杯の順位も決して高くはないから，Fa'apito Saofa'iga の第三位 *tulafale* 団であることには疑問の余地がなかろう。けれども To'afā と Saofa'iga の関係はもう少し複雑な様相を呈している。それはすなわち，To'afā のファレアタにおける特別な位置とも関連しているだろう。

まずひとつには，To'afā の擁立する *ali'i* が必ずしも明確でないことがあげられる。*ali'i/tulafale* の組み合わせは相対的要素も含みながら，通常は特定の *ali'i* には特定の *tulafale* が結びついて1組となっている。「3人の *ali'i* に3つの *tulafale* 団が仕える」とは一般にいわれるものの，レペア村内部での Faumuinā と Saofa'iga の結びつきは明らかであるし，またヴァイウス村の Seiuli に対しては同じ村の Ulugia (Fa'apito Saofa'iga) が仕えている，という具合に2組のセットとなっている（表1参照）。それでは同様に Matai'a には To'afā が仕えているといってよいであろうか。この両者はある水準において *ali'i/tulafale* の対の関係をつくっているといえるだろうが，他の2組の主従関係とはやや性格を異にしているといえよう。まず To'afā 自体がファレアタの西と東に2称号ずつ分かれており，その2称号と Matai'a のうちの1称号が同じ村にあるものの，他はバラバラに異なる村に位置していることがあげられる。また野外 *fono* の際に Matai'a は Saofa'iga と Fa'apito Saofa'iga の座る家に Faumuinā, Seiuli と同席するのに対して，To'afā は2称号ずつ別に2軒の家をかまえるのである。To'afā はこの時別の家にいる Matai'a の意見を代弁することはない。そしてまた連絡網についてみてみると，Matai'a と Ulugia を結んでいるのは Saofa'iga であり，To'afā ではないことにも注意を払う必要がある。特にヴァイモソ村の Matai'a については，手近なところに Une, Manuleleua (To'afā のうちの2称号）がいるにもかかわらず，隣り村の Saofa'iga に頼るのだから，やはり Matai'a と To'afā の関係は，Faumuinā と Saofa'iga との関係や Seiuli と Ulugia のそれとパラレルに考えることはできない。

もうひとつは，To'afā と Saofa'iga の間にある種の葛藤が見られることで，格は To'afā の方が上であるという人々もいるが，最も名誉ある仕事を Saofa'iga が独占していることである。ファレアタが集まると最初に演説をし，*tulafale* の中で最初にカヴァを飲むのは Saofa'iga である。すなわちこれは，Saofa'iga が *tulafale* として最も栄光ある役割を掌中におさめていることを意味する。しかし一方，To'afā の方がSaofa'iga より格が高いという考えを裏付ける証拠もないわけではない。Saofa'iga は一番に演説をし一番にカヴァを飲むけれど，実際にそれを行なうことのできるのは Saofa'iga を率いる2人，A'i と Vaigagutu だけである。それに対して To'afā は，

1称号が Va'aulu と共に上座の半分を独占しており，演説も1称号ずつ，カヴァも1称号ずつという具合に，To'afā の各称号が儀式に参加することができる。また野外 *fono* の際には他はすべてが1軒の家に入るのに To'afā は2称号ずつ2軒の家を占めるということも注目に値しよう。

本論考の残りの部分では，以上2つの疑問点を解明しつつ，これまでに提示していない *ali'i* の系譜や *tulafale* 間の権力の推移に関する伝承を明らかにしながら，ファレアタの政治構造にさらに深い分析を加えたい。そのために，*ali'i* 相互の関係，*ali'i*/*tulafale* の対の関係，*tulafale* 相互の関係の3つの分析軸を設けて考察していこう。

Ⅳ. *ali'i* たち

この章の目的は，ファレアタの高位 *ali'i* 称号の系譜を調べ，この小地方のなりたちを考察することにある。ファレアタはトゥアマサガ地方の一部分を構成しているが，成立はトゥアマサガよりもさらに古く遡ることができる由緒ある地縁集団である。ここで重要なことは，トゥアマサガ地方とファレアタが全く異なる統合原理に基づいていることで，それはおそらくファレアタがもともと村として成立してから大きく成長したのに対し，トゥアマサガは後世になって村の連合体として統合されたという成立の過程での相違に関係があろう。トゥアマサガで最高位の *ali'i* は Malietoaであり，トゥアマサガの統合はこの称号の系譜に基づいている。一方ファレアタは，Malietoa とは無関係に統合されているものの，トゥアマサガ全体の統合レベルとは別の形でこの称号が重んじられているのである。ファレアタを地縁組織全体の中で理解するために，ここではまず，トゥアマサガの組織について記述した上で，ファレアタの *ali'i* たちについて検討しよう。

1)　トゥアマサガの組織

トゥアマサガの *fa'alupega*[14)]

1　Tulouna Faleono o Atigana,
2　　ma le itūtolu o Sāgana.
3　Tulouna Faleata ma le Gafa.

14) この *fa'alupega* はトゥアマサガの首村のひとつ，マリエ村の有力 *tulafale* から得た。

（日本語訳）

1　アティガナの六家よ，
2　　そしてサガナの三地方よ。
3　ファレアタとサファタよ。

トゥアマサガを象徴する最も位の高い称号である Malietoa の称号名は，かつてトンガがサモアを征服していた昔に，Atiogie という名の人物の息子の Tuna と Fata がトンガの王をサモアより追い出した時，王が "Malie toa! Malie tau!"（何と勇敢な者たちよ！何と勇敢に闘ったことか！）と叫びながら逃げていった故事に由来する [STUEBEL 1897: 86, 182; KRÄMER 1902: 259; HENRY 1979: 23]。しかし Tuna と Fata はどちらがこの称号を得るかで互いに譲らなかったので，Atiogie はけんか両成敗とばかりに別な息子の Savea に称号を与え，サガナ (Sagana) の地に政治の中心を形成させた。そして Tuna にはファレアタへ行き *itū'au*（戦いの時の主戦力となる地縁集団）を形成することを命じ，Fata には南岸へ下りサファタ (Safata: Fata の *'āiga* の意）村をつくり，*alataua*（戦いの時には神に勝利を祈り，和平の時にはその交渉にあたる地縁集団）を形成することを命じた [KRÄMER 1902: 260; HENRY 1979: 26]。

かくして今日に到るまでサガナはトゥアマサガ地方の政治の中心であり，ファレアタは *itū'au* として勇敢な戦いぶりで知られ，サファタは *alataua* として和平の時の媒介者という貴重な働きを担っている。サモアではこの *itū'au* と *alataua* は地縁組織を形成する時の対を構成する要素として重要であり，*fa'alupega* の3行目は特別にこの対となる *itū'au* と *alataua*，すなわちファレアタとサファタに対して呼びかけている。サガナの三地方とはトゥアナイ (Tuana'i)，アフェガ (Afega)，マリエ (Malie) の3つの村をさしていう。このうち，アフェガ村とマリエ村はあわせてトゥアマサガ地方の首府として *laumua*[15] とも呼ばれる。アフェガ村には Tuisāmau，マリエ村には Auimatagi と呼ばれる *tulafale* 団がおり，全国レベルの集会ではこれら2つの *tulafale* 団がトゥアマサガ全体の代表となる。

Malietoa Savea の息子は Malietoa Ganasavea であるが，彼には6人の息子があり，それぞれはトゥアマサガ各地に村づくりのために派遣された。これが *fa'alupega* の1行目に見える Atigana の六家であり，Luatua はサレイモア (Saleimoa) 村へ，

15) トゥアマサガの西，アアナ地方の首村はレウルモエガ (Leulumoega) 村，東のアトゥア地方の首村はルフィルフィ (Lufilufi) 村であるが，この両者は各々 *tumua* と呼ばれるのに対し，トゥアマサガの首村だけは *laumua* と呼ばれる。これについてはいくつかの伝承があり，また様々に解釈されているが，ここでは深く立ち入らないでおく。

Seupule, Taogana, Nu'uiali'i の3人はファレウラ (Faleula) 村へ，Fuataogana はヴァイマウガ (Vaimauga) 村へ，Saveatama はシウム (Si'umu) 村へ行き，各々の村を建設したといわれる [KRÄMER 1902: 242; HENRY 1979: 33]。系譜と村の関係を解り易く示したのが図4である。

ここでトゥアマサガ地方の連帯を形づくる上で，Malietoa の系譜がいかに用いられているか考察してみる必要があるだろう。先に引いたサレイモア村には Malietoa Ganasavea の息子を初代とする Luatua という称号名が今でも存在するが，この村の称号名すべてが Luatua ないしは Malietoa の系譜に辿れる訳ではない。しかしサレイモアという地縁集団全体は，その一員である Luatua の系譜からファレウラ村，ヴァイマウガ村，シウム村と並んで兄弟村として位置づけられているのである（図4参照)。つまり Malietoa の系譜は称号間の序列を形成するものでは全くない。系譜によって結びつけられているのは，称号名同士ではなくその称号名を含む各々の地縁集団である。そしてその地縁集団内に含まれたいくつかの称号は互いの系譜とかかわりなく地縁により結びつけられているのである。次にファレアタに関していえば，Tuna という名はもはやファレアタの重要な称号名のリストの中に見出すことはできないが，兄弟であった Tuna と Fata の関係と父 Atiogie の任命の故事ゆえに，南岸のサファタ小地方が *alataua*（勝利を祈り，和平の交渉にあたる媒介者）であるのに対し，それと対になる *itū'au*（主戦部隊）という役割を担っていることに注目したい。つまり，地縁集団同士はこの系譜により格づけされているというよりは，単にそれを通じて互いの連帯を強め，役割分担を行なっているのである。各々の地縁集団はいくつもの称号から成っており，各々独立に発生したものであっても，そのうちの重要な称号，あるいは過去の事件により，地縁集団全体としては互いに結びつけられ関係づけられているということがいえる。

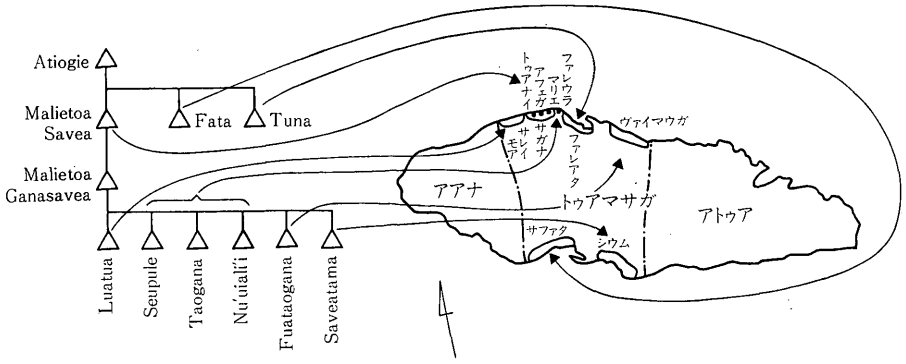

図4　トゥアマサガのなりたち

2) ファレアタの *ali'i* たち

さてそれではいよいよ，ファレアタの*ali'i*称号についての考察に移ろう。ファレアタはトゥアマサガの中では，初代 Malietoa であった Savea の兄弟の Tuna が*itū'au*を形成したところとして他の村や小地方と関連づけられているが，起源そのものは Malietoa よりも古くに溯る。Krämer の記した Malietoa の系譜は初代の Malietoa Savea から溯り，八代前の Si'usei'a まで記録してある [KRÄMER 1902: 241] が，Si'usei'a の孫に Ata という人物が見えており，これがファレアタ (Faleata: Ata の家) の開祖であると伝えられているのである。Savea の祖父 Fe'epō はファレアタの西部の山の中の村アエレ (Aele) に住んでいたし，また Savea は Fe'epō の息子の Atiogie とトアムア村の *tulafale*, Ale の娘の Tauaiupolu の間に生まれた，という経緯からは，ファレアタが Malietoa 家揺籃の地としてこの称号と特に縁が深いことを示すものであろう。

さてこの Si'usei'a から Ata を経て Malietoa に到る系譜 [KRÄMER 1902: 241] を図5に示してみた。Ata の最初の結婚から出た孫に Matai'a の名が見えるが，これが今日の Matai'a 称号の起源であるとみなすことができる。Matai'a はこのように Malietoa 称号の成立以前からある古い称号名であるらしい。

一方 Seiuli はあちこちの村に「Malietoa の息子」格の称号名として存在している。これは Malietoa が普通の村の高位 *ali'i* や *tulafale* の娘と結ばれて男子が生まれた時につけられる名で，そのままその村の高位称号となって残ったものである。母方の親族によってその村の威信を高めるべく擁立された称号名であるから，村の中では高い地位をもつが，Malietoa の称号名を継承する直系ラインからは遠のく[16]。ファレアタの Seiuli は，Krämer の系譜によると，Savea より数えて13代目の Malietoa 'Ae'o'ainu'ū が Ulugia の娘と結婚してもうけた息子から発生している [KRÄMER 1902: 244]。ここでは Seiuli と Ulugia の間の *ali'i*/*tulafale* 関係が Seiuli の称号名と同時に始まっていることがわかる。

同格の *ali'i* である Matai'a と Seiuli も起源的にはこのように20世代も隔たっているのである。互いに共通の祖先をもちながら，その称号の正統性(レジティマシー)の根拠は全く異なっている。Seiuli がその出自を直接 Malietoa に辿れる称号名である事実を積極的に利用して，"alo o Malietoa" (Malietoa の息子) として良い血筋を誇っているのに対し，Matai'a はむしろ Ata の孫としてファレアタに君臨する根拠を示しているのである。互いに祖先を共有していても，その正統性の根拠はかくも異なっており，も

16) 同様の称号名に Tuilaepa, Papali'i などがみられる。

はや互いに血筋を辿ることができるという意識はほとんどないし，また辿る必要もないといってよい。

Faumuinā 称号の起源はおそらく，トゥアマサガの西のアアナ地方で最も高い位の称号，Tuia'ana をもっていた Tuia'ana Faumuinā (Malietoa 'Ae'o'ainu'ū より約2世代古い）にあると考えられるが，それがいかなる経緯でファレアタにやって来たのかについては今のところデータをもっていない。Tuia'ana Faumuinā 自身かなり世代が新しいので，ファレアタの Faumuinā 称号もそう古いものではなさそうだ。

以上の如く系譜から判断すると，Matai'a 称号は今日ファレアタに君臨する三大 *ali'i* 称号のうちでは最も古い起源であるらしいことがわかるが，同様に，Matai'a の

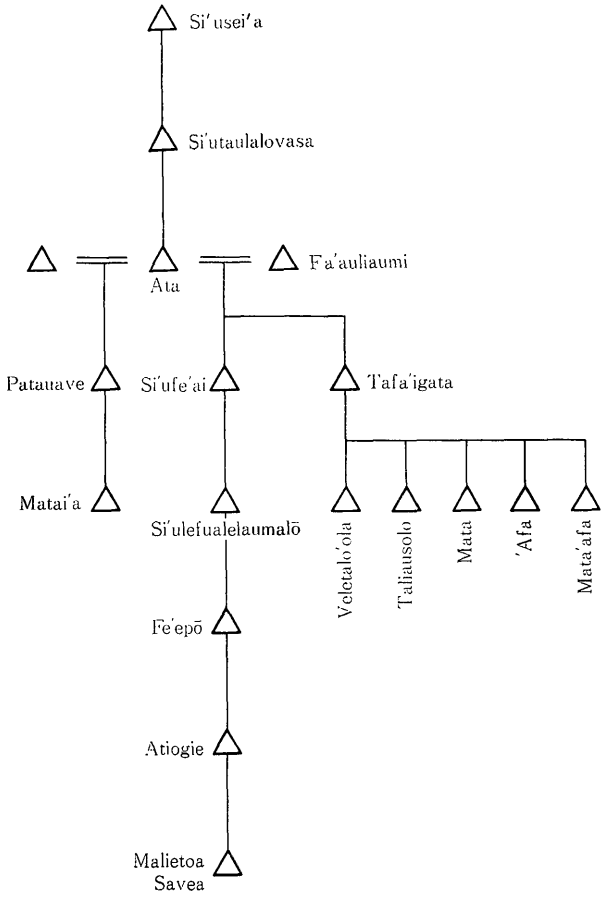

図5　Siusei'a から Ata を経て Malietoa に至る系譜

称号が2つに分かれ，ヴァイモソ村とヴァイテレ村の双方にまたがっていることも，この称号が古いことを示す証拠のひとつであろう。称号の分裂[17]は同じ村（地縁組織の最小単位）の内部で生じるのが普通である。ところが Matai'a 称号は2つの村に分かれており，しかもその間にいくつもの村が介在するということは，何を意味するであろうか。これは他でもない，分裂直後の Matai'a 称号は地理的に隣合っていたのが，後に人口が増え多くの称号名や村が生じて2つの Matai'a 称号の間に割って入る結果となったことを示唆しているのである。おそらくはそれほどに Matai'a の称号名は古いものなのだろう。

さてここで，Mata'afa という，かつてファレアタに最高位で君臨したが，今では他の地方へ移転してしまった称号名について触れておこう。先に検討した今日のファレアタの *fa'alupega* の中に Mata'afa の名は含まれていないが，古い *fa'alupega* の中には見ることができる。Krämer のテキスト中の *fa'alupega* [KRÄMER 1902: 227] とサモア組合派教会 (Congregation Christian Church of Samoa) の発行した *fa'alupega* 集 [1978: 150] を次に掲げてみよう。

Krämer によるファレアタの *fa'alupega*

1	Tulouga a 'oe Faleata	13[18]
2	tulouga a 'oe Tauaitu	
3	tulouga a āiga e fā	5
4	tulouga a ali'i e lua:	
5	susū mai lau susuga a Matai'a	3
6	afio mai lau afioga a Faumuinā	2
7	susū mai lau susuga a Seiuli	4
8	'o le alo o Malietoa	
9	ae tulouga a lou ali'i 'o le Mata'afa.	

（日本語訳）

1　あなた方ファレアタの *tulafale* よ，
2　あなた方 Tauaitu よ，
3　4つの *'āiga*（To'afā のこと）よ，
4　2人の *ali'i* よ：

17) 本文158頁参照。
18) 各行の終わりに付した番号は157頁のファレアタの *fa'alupega* にあらわれている称号名の行数を示す。

5　Matai'a よ，ようこそ，
6　そして Faumuinā よ，
7　Seiuli よ
8　　汝 Malietoa の息子よ，
9　Mata'afa よ，ようこそ！

教会の *fa'alupega* 集によるファレアタの *fa'alupega*

1	Tulouna oe Faleata	13
2	Tulouna oe Tauaitu	
3	Tulouna oe le Saofaiga a le Atua	6
4	Tulouna oe outou to'afā	5
5	Tulouna le Pulelua ma le faigā ma le Nofoapule	8, 9
6	Afifio mai oulua Tama a le Fale	
7	Afio mai Faumuinā	2
8	Susū mai Matai'a	3
9	Susū mai Seiuli o le alo o Malietoa	4
10	Afifio mai Tapaau e lua o Letele ma le Matā'afa.	

（日本語訳）

1　ファレアタの *tulafale* たちよ。
2　Tauaitu よ。
3　Saofaiga a le Atua よ。
4　あなた方 To'afā よ。
5　Pulelua, Faigā, そして Nofoapule よ。
6　あなた方２人のファレアタの王子たちよ，
7　Faumuinā よ，ようこそ。
8　Matai'a よ，ようこそ。
9　Malietoa の息子，Seiuli よ。
10　最高位の Letele と Matā'afa よ。

Krämer の *fa'alupega* では９行目，教会の *fa'alupega* では10行目に Mata'afa が登場する。一方，先に示した Si'usei'a から Ata を経て Malietoa に到る系譜（図５）を見ると，Ata の２度目の結婚から生まれた Tafa'igata[19] の５人の子のうち最後の子がMata'afa である。Tafa'igata は最後の息子にMata'afa と名づけた後，「Tauaitu（*tulafale* 団と思われる）を呼び，この子をお前たちの *ali'i*（主人）とする」，と宣言し

19) Tafa'igata は今日，刑務所の置かれているファレアタの内陸の地名であるが，同時にファレアタのいくつかの伝承に登場する興味深い名である。

た。これがファレアタの *ao* 称号[20]，Mata'afa の起源である。」と Krämer のテクストには記してある [KRÄMER 1902: 255]。

Mata'afa は少なくとも系譜の上で見る限り，Matai'a と同じ時代に発生し，しかも Matai'a より高い称号であったが，ある時から同じウポル島の東部，アトゥア地方のアマイレ (Amaile) 村に移ってしまった。アトゥアで最高位を占めるが現在空位となっている Tuiatua の代用となるほどに格の高い称号である。教会の *fa'alupega* の10行目に見える Letele は Mata'afa と同格の女性称号 (Mata'afa の *tāupou* 称号[21]かもしれない) であったが，今日では Faumuinā の *tāupou* 称号となっている。また Mata'afa の *tulafale* 団として Tafa'igata に任命されたと伝えられる Tauaitu[22] は今日レペア村にある。この2つの事実からは，Faumuinā の称号は Mata'afa がアマイレ村に移った後の空隙を埋める形でファレアタの地縁組織の構造の内に入り込んでいるらしいことが推測できる。とはいえ，Faumuinā は Mata'afa ほどに格が高くはない。

以上で検討した *ali'i* 同士の関係を整理してみよう。ファレアタの *ali'i* 称号はたいてい開祖である Ata へと系譜的につながっているようではあるが，それが必ずしも称号の直接の正統性には結びついていない。例えば Seiuli は Ata につながることよりも，もっと後に生じて最も勢力を得た高位称号 Malietoa に辿れることの方をはるかに大切にしている。しかも20世代も間に隔たりのある Matai'a と Seiuli の両称号はほぼ同格にある。また Malietoa や Ata に辿れるかどうかすらわからない Faumuinā の称号もある。すなわちトンガなど他の多くのポリネシア社会の原則であった年長優位の原理による直系／傍系の別と直系への系譜的距離による称号の序列づけ，といったものは，サモアでは必ずしも重要とはなっていない。サモアの首長称号も系譜を大切にするが，それはトンガの場合のように直系／傍系の区別により称号の序列の中で自分の占める位置を明確にする，という目的であるよりは，むしろ単に自分の称号の由緒正しさを示すひとつの根拠とするためである。由緒正しささえ示せれば，Seiuli のように起源の新しい称号も Matai'a のように古くからファレアタに君臨した称号と同格になることができるのである。

トゥアマサガは Malietoa の称号という権威により，部分の関係がつくられ，まとめられているけれども，それはごく表面的なことであり，細部まで行き届いていると

20) 親族集団ではなく *tulafale* 団により選出される名誉の高い称号。
21) 脚注 9) 参照。
22) Tauaitu は Krämer の *fa'alupega*, そして教会の *fa'alupega* の双方とも2行目にその名が出てくる。詳しくは次章で再びとりあげる。

はとてもいい難い。トゥアマサガのレベルではTunaに表象されるファレアタであるが，その内部ではもっぱらTunaよりも古いAtaやTafa'igataの権威が，依然有力である。しかしSeiuliのように，新しいけれど強大なMalietoaの権威に依存している称号もある。ファレアタという地縁組織はこれら多元的な権威を束ねるようにして成立しているのである。

V．*ali'i/tulafale* 関係

ali'i と *tulafale* の間の「主従関係」は，固定的なものではないが，一応の組み合わせが成立していると思われる。*tulafale* が特定の *ali'i* のために働くというのは，*fono* のような地縁集団の公的行事よりも，むしろ *ali'i* の親族集団にかかわる私的行事の時の方がはっきりと現れてくる。ここでは高位 *ali'i* の葬式 (*lagi*) における *tulafale* の役割分担に注目してみよう。多くの社会と同じくサモアの葬式においても親族一同が集まってくるが，サモアの場合その他に全国から *tulafale* たちが集合して，ヤシの葉を捧げ持ち，大声で決まり文句を口々に叫んで *ali'i* の死を悼む。これは *'āuala* と呼ばれるが，*ali'i* の位が高ければ高いほど *'āuala* は大きく，また *'āuala* が大きければ大きいほどその *ali'i* の称号名の権勢を示すものとして *ali'i* の親族は喜ぶのである[23]。こうして葬式が無事終了すると，*ali'i* の親族集団は *'ie toga*（細編みござ）[24]を *'āuala* に参加した *tulafale* たちに配らなくてはならない。*'ie toga* の分配は屋外で皆の見ている前で，長い演説と共に行なわれる儀礼的なものである。この時，親族集団と *tulafale* たちは互いに対面するが，この双方を代表する2人の *tulafale* のやりとりのうちに分配が進行する。親族集団にかわり，*talia* (*tali toga*) と呼ばれる役を務める *tulafale* は，親族集団の利益を代表し，限りある *'ie toga* を有効に――できるだけ少なく，しかし親族集団の名誉及び称号名の名声は高まるように――分配しようとするが，一方，*'āuala* に参加した *tulafale* たちの代表を務める *tulafale* は逆に参加者ひとりひとりが分配を受けるように親族集団の代理たる *talia* に迫るのである。さてファレアタにおける各 *ali'i* の *lagi*[25] での *tulafale* の役割分担は以下の通りである。

---

23) 葬式の詳細な分析や *'āuala* の役割については [山本・山本　1981: 148–156] を参照のこと。

24) 交換財。貨幣が入ってくる以前はサモアで最も貴重な財であった。今でも交換儀礼において欠くべからざるもので，需要度はたいへん高い。

25) 古来からのならわしではファレアタの *ali'i* は本来誰も *lagi* を行なってはいけないとされている。しかしながら近年の各称号間格差の平準化にしたがって，ファレアタでも他の地方同様，最近は *lagi* が頻繁に行なわれるようになっている。

亡くなった *ali'i*	親族代理 (*talia*)	*'āuala* 代表
Faumuinā	Saofa'iga	To'afā
Matai'a (ヴァイモソ村)	Une, Manuleleua	Saofa'iga
Matai'a (ヴァイテレ村)	Toī, Tūlaga	Saofa'iga
Seiuli	Ulugia	Saofa'iga

talia は，対外的に *ali'i* の対となって代理を務める *tulafale* であるが，ここでは Faumuinā/Saofa'iga, Seiuli/Ulugia，またヴァイモソ村の Matai'a/Une, Manuleleua (To'afā のうちの2称号)，ヴァイテレ村の Matai'a/Toī, Tūlaga の組み合わせが成立している。Toī と Tūlaga はファレアタ全体ではそれほど格の高い *tulafale* ではないが，ヴァイテレ村の Matai'a の親族集団に属する専属 *tulafale* である。また *'āuala* を代表するのは，ファレアタを代表する *tulafale* となっており，原則として Saofa'iga が，また Saofa'iga が talia を務める時には To'afā がこれを務めるということがいえるだろう。

ali'i/tulafale 関係について，筆者は第Ⅲ章で Matai'a と To'afā の組み合わせは他の2組，Faumuinā/Saofa'iga, Seiuli/Ulugia の組み合わせとは性格を異にするのではないかと指摘したが，この節での *ali'i* の *lagi* についての検討からも同じことがいえる。後の2つの組み合わせは，各々レペア村，ヴァイウス村の内部で成立しているもので，特に Seiuli の場合は初代 Seiuli の母方祖父が Ulugia であったわけだから，両者の結びつきは称号の成り立ちからして明らかなものとなっている。それに対して Matai'a/To'afā の組み合わせはもっと緩やかなものだが，この両者の関係を理解するのに，各々の称号の地理的な配置を考察することが役に立ちそうである。

Matai'a が2つの村——しかも間にいくつもの村をはさんでいる——にまたがって称号分裂をおこしているのが珍しいということは先に指摘したが，ひとつの *tulafale* 団がこのように西と東に分かれて存在していることも同じく珍しい。そしてこれは Matai'a の称号分裂と一致しているかの如くである。すなわち，東の Matai'a (ヴァイモソ村) には Manuleleua と Une が，西の Matai'a (ヴァイテレ村) には Ale と Ulu が，というように対称的な配置をとっている。但し，実際に西の Matai'a と Ale, Ulu のふたりは村を異にしているために「主従関係」の意識は消えてしまっている。西の Matai'a の代理を務めるのは Ale と Ulu ではなく，ヴァイテレ村の Toī や Tūlaga である。

この地理的な称号の配置を時間軸の中では次のように推測することができる。すなわち To'afā はかつてより Matai'a を主人とする由緒ある *tulafale* 団[26] であり，村

の中では Matai'a 称号を囲むように，その西には Ale と Ulu，東には Manuleleua と Une というように住んでいた。その後 Matai'a 称号が2つに分裂して，2つの *'āiga* の分枝がこの称号を各々独立に擁するようになった時，*tulafale* も2つのグループに分かれて Ale と Ulu は西の Matai'a に，Manuleleua と Une は東の Matai'a に仕えるようになった。やがて時間がたち，人口増加及びファレアタの膨脹に伴って両 Matai'a 間の地理的距離も広がり，西の Matai'a と To'alua（2人：Ale と Ulu）は主従関係が薄れ，今日のように Ale と Ulu だけで単独の村を形成し，Matai'a は自らの *'āiga* の *tulafale* としてもっと格の低い Toī や Tūlaga などを用いるようになったのである（図6）。

ali'i/tulafale の対の関係を崩してしまっているのは西の Matai'a と To'alua（2人：Ale と Ulu）ばかりではない。東の Matai'a と To'alua（2人：Manuleleua

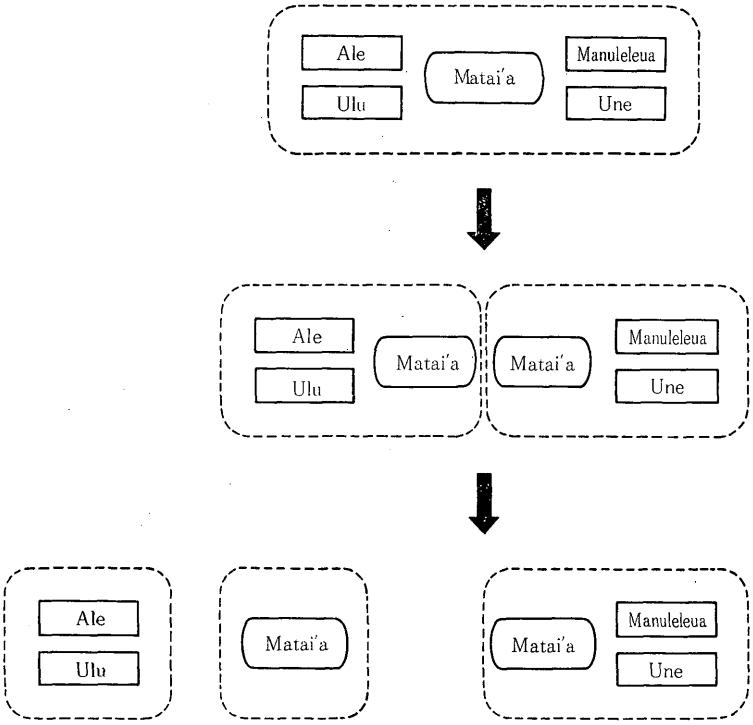

図6　Matail'a と To'afā の位置関係の推移

26) Matai'a の称号の成立が相当古いものであることは系譜から容易に推測できるが，To'afā の場合，*tulafale* の系譜は記録されることが少ないので，その成立がどれだけ古いかを調べるのは難しい。ただし，トアムア村の Ale の場合，初代 Malietoa であった Savea の母 Tauaiupolu が Ale の娘であったことは有名な伝承であり，この頃既に Ale の称号が成立していたのであれば，かなり古いということができよう。

と Une）にしても，西の組み合わせほどに崩れてはいないが，Faumuinā/Saofa'iga や Seiuli/Ulugia の組み合わせに比べると関係が弱まってきているといえよう。野外 *fono* の際に Manuleleua と Une は Matai'a とは別の家をかまえるのだし，*fono* 召集に際して Matai'a と Ulugia との間を結ぶのはこれら2称号のかわりに Saofa'iga である，ということはそのあらわれと考えられる。この理由は様々に考えられるが，そのひとつとして西の Matai'a と To'alua（Ale と Ulu）が関係を崩してしまっていることがあげられよう。対称型で存在している2組の *ali'i/tulafale* の関係で一方の関係の崩壊が他方にも影響を与えているという推論がここでは可能である。東の To'alua も Matai'a に仕える *tulafale* として Matai'a の下に安住できずに，西のペアである Ale と Ulu と一緒に To'afā として *ali'i* から独立する傾向を見せているように思える。

Ⅵ. *tulafale* たち

前章で *ali'i* と *tulafale* の結びつきについて考察したが，このように特定の *ali'i* と *tulafale* の関係がはっきりと現れるのは，*ali'i* の親族にかかわる行事が主である。第Ⅲ章に示したような *fono* の機会には，これら *ali'i/tulafale* の特定の関係よりもむしろ，*tulafale* の中立性が主として表明される。例えば，Saofa'iga がファレアタの *fono* で最初の演説をしても，それはファレアタの *fono* 全体のためで，Faumuinā の代理としてしゃべっているのではない。この Saofa'iga が不在であればそのかわりに To'afā が演説をしてみてもそれは同じである。この点についていえば *tulafale* と *ali'i* は演説をする，しないの区別ばかりでなく，*fono* における自らの代表性において全く異なる役割をもっているといえよう。すなわち，第Ⅳ章で明らかとなったように，*ali'i* は *fono* において地縁集団の各々の部分を代表し，異質な権威を体現しているのに対し，*tulafale* はそれらをまとめ，たばねる役割を果たすのである。*ali'i* 称号が複数あるのは問題もないし当然だが，それらを媒介する *tulafale* は役割ごとに1称号ずつでよいことになる。ファレアタの *fono* において，*ali'i* は同格であることを強調するように席次やカヴァ儀礼が仕組まれているのに対し，*tulafale* の間には役割の差，格の差がはっきりし易いのは，そうした理由によるものであろう。この節では以上の前提をふまえて，ファレアタの *tulafale* 相互の関係をとりあげてみよう。

ファレアタの三大 *tulafale* 団，To'afā, Saofa'iga, Fa'apito Saofa'iga のうちで

Fa'apito Saofa'iga が第三位であることにはさほど疑問はなかろう。ここで焦点となるのは何といっても To'afā と Saofa'iga の間に見られる葛藤である。ファレアタの tulafale 団のうち To'afā と Saofa'iga が一見奇妙な関係にあることは先に説明した。ファレアタの諸々の称号保持者が集まった時に，*tulafale* の最も重要な役割は Saofa'iga のうちの1称号が果すことになっている。しかし一方 To'afā は Saofa'iga の次ではありながら，4人全員が演説をしカヴァを飲むのであって，1称号ずつが重視されていると考えることも可能であろう。また野外 *fono* においては，To'afā は彼らだけで3軒のうちの2軒を占めるのである。この To'afā と Saofa'iga の関係について筆者はある興味深い伝承を得たので，これを中心に考察をすすめよう。

ここに紹介する伝承は，第Ⅰ章で述べた To'afā のうちのある称号を頭とする親族集団に属するインフォーマントから筆者がきき出したものである。彼はこの話を，To'afā と Saofa'iga の関係について論争がおこった時にファレアタ全体の *fono* が開かれ，当時の Faumuinā の称号保持者が演説の中で語ってくれたものだといいつつ教えてくれた。

Saofa'iga の *tofiga*（任命）[27]

Tafa'igata という名のファレアタの *tama*（身分の高い *ali'i*）がアエレ村から手さげ籠をもってやってきた。この中には *atua*（または *aitu*：精霊）が入っていた。彼はまず最初に Ale の家を訪問した。Ale はカヴァでもてなした。彼は Ale にいった。「あなたは To'afā の中でも一番最初にカヴァを飲み，最初に演説しなさい。」これ以後今日に到るまで，ファレアタが集まると必ず Ale が To'afā の中では最初にカヴァを飲み，最初に演説をする。次に Tafa'igata はヴァイモソ村へ行き，Manuleleua の家を訪ねた。同じようにここでもカヴァを飲んだ。カヴァを飲みながら彼はここ（うしろ）に籠を置いていた。この中には *aitu* が入っていた。そして彼はいった。「あなたは To'afā の中では，Ale に次いで二番目にカヴァを飲み，二番目に演説をなさい。」これが済んでからもどってレペア村に来た。レペアでは Veletaloola という人の家に来た。*matai* が集まってきた。籠もそこにあった。カヴァが始まった。彼は Ale といる時も，まずうしろの籠にカヴァをふりかけてから飲んだ。ヴァイモソ村でもそうだったし，レペア村でもそうした。この籠の意味を初めて悟ったのはレペアの *matai* たちであった。人々は彼がカヴァの杯を受け取って籠にふりかけているのを見た。Veletaloola はいった。「お止めなさい。どうしてあなたはうしろにいる *aitu* に先にカヴァをあげて，自分は後から飲むのですか。」彼はこういった。「解ってくれてありがとう。あなたの名は Saofa'iga a Atua（精霊の集会）としなさい。あなた方はファレアタの *moa vini mua*（一番鶏）となりなさい。」この *tofiga*（任命）の後今日に到るまで，ファレアタで会合があれば必ず Saofa'iga が一番に演説をし，そして最初にカヴァを飲むのである。

27) この記述は，サモア語で録音されたテープを筆者が聴きながら，日本語に大意訳したものである。

これは，サモアにおいて何らかの地位，役割，権能などの正統性を説明する起源伝承としてよく用いられるパターンを踏襲している。すなわち，権威をもつ人に対して何らかの功績をなした故に，今日の地位に任命された，というものである。ここでは To'afā は既成のものとしてあり，その中で Ale と Manuleleua がいかに今日の順位を得たか，ということを説明すると共に，Saofa'iga の形成とそれがいかにして To'afā よりも名誉ある役割を得たかということを説明しているのである。

この伝承の目的は，最初に演説をして最初にカヴァを飲むという Saofa'iga の名誉ある役割の起源を語り，その権能の正統性を示すことであろう。ここでは To'afā は既成のものとして現れ，その To'afā の権能をこえているところに Saofa'iga が位置づけられている。この伝承はかくして，To'afā から Saofa'iga への勢力交替を説明し正統化するものと解釈できるかもしれない。

第Ⅳ章においては，ファレアタにおける3つの高位 *ali'i* 称号のうち，Matai'a が最も古くより存在していたらしいことを示した。また前章で To'afā はかつてはこの Matai'a 称号に仕える *tulafale* であり，おそらくはこれも相当古くからファレアタに存在したであろうという推論を展開した。Saofa'iga は，Matai'a より歴史の浅いと思われる Faumuinā に仕える *tulafale* 団であるから，To'afā より新しい勢力であることは当然推測できることである。

しかし一方，この伝承を以上の如く歴史的に解釈するのではなく，構造論的に理解することも可能であろう。Saofa'iga の役割の正統性を示しているとする歴史的解釈は，筆者自身が始めたのではなく，むしろファレアタの人々が伝承の中に織り込んで行なっている説明である。この伝承は To'afā の側からはある種の無念さをもって語られるが，それと同時に To'afā の由緒正しさは，「儀礼のおりには，*ali'i* の如き威厳をもって *fa'amāepaepa*（おごそかに座る）する」と表現される。

この伝承の内で To'afā を既成のものとしていることは，その由緒正しさを表現したものととれないことはない。すなわちこの伝承は，To'afā と Saofa'iga との間の葛藤を，Saofa'iga には功績による権能を与え，しかし一方 To'afā には由緒正しさを与えることによって，解消しようと試みているという解釈も成り立ち得る。To'afā は名をとり，Saofa'iga は実をとったのである。

そしてこの Saofa'iga と To'afā の間を媒介しているのが，Tafa'igata という人物であるのは興味深い。これはファレアタの伝承にしばしば登場する名で，他の称号の起源を説明する伝承に登場するものの，Tafa'igata という称号名は少なくとも今日では存在していないし，Mata'afa のようにかつて存在していたという話もない。

Tafa'igata はファレアタ全体にとって，個別の部分（例えば，特定の村とか，特定の称号名とか）の利害にかかわらない，しかも権威ある名であるということができよう。その意味ではまさに，To'afā と Saofa'iga の利害対立を媒介するにふさわしい人物である。

さらに Tafa'igata のやってきた村アエレもまた興味深い。通常，内陸 (*uta*) の村は畑つくりのための新開地で，海沿い (*tai*) の村の一部であることが多いが，アエレ村は初代 Malietoa の祖父 Fe'epō も住んでいたと伝えられるところであるから，由緒ある地名である上に，どの海沿いの村にも属さない。さらにアエレ村には *fa'alupega* もなく，称号も存在しない。つまりは海沿いのファレアタのつくる称号システムからは超越的な存在なのである。ファレアタのどの部分でもない村として，まさに To'afā と Saofa'iga の利害対立を媒介する者の出身地にふさわしいといえよう。

つまり，ファレアタの個別の利害に属さない村からやってきた，やはり個別利害を超越した人物である Tafa'igata によって，To'afā と Saofa'iga の間の葛藤が媒介され，To'afā は由緒正しさを，また Saofa'iga は功績による権利を得たとする解釈も可能である。

ここまでの分析を通じてみると，*ali'i* と *tulafale* の地位，役割，権能の正統性の源泉というものに差がみられるようである。*ali'i* の場合の正統性の源泉は，主として血筋の由緒正しさである。初代 Matai'a はファレアタの開祖 Ata の孫であったし，Seiuli は Malietoa 'Ae'o'ainu'ū の息子である。また Faumuinā は隣りのアアナ地方の最高位称号 Tuia'ana の称号を持っていた Tuia'ana Faumuinā と関連をもつ。これに対して *tulafale* の正統性の根拠は，主として何らかの功績に対する *tofiga*（任命）であるといえよう。ここでは To'afā 及び Saofa'iga の *tofiga* しか提示できなかったが，*tulafale* の *tofiga* に関する話は Krämer にも数多く見られるし，筆者も他の地方に関していくつか採録した。その話の中には，トゥアマサガ地方の成立伝承（Atiogie の任命と Malietoa Ganasavea の任命）のように *ali'i* に関するものも混っているが，これらの *ali'i* は話の中で *tofiga* と同時にその血筋が明らかにされており，功績というよりはむしろ血筋のゆえに *tofiga* を与えられたと考えることができる。たしかに *tofiga* をもつということ自体は，より高い何らかの権威に従属しているということを示すものであるともいえよう。ある高位 *ali'i* に，あなたの称号名の *tofiga* は何かとたずねた時，彼は嫌そうな顔をして，そのようなものはない，といい放った。すなわち，*ali'i* の地位の正統性は生得（アスクリプション）であり，*tulafale* のそれは業績（アチーブメント）であると大きく区別することも可能であろう。

ここで To'afā という *tulafale* 団についてみてみると，To'afā 自身の *tofiga* に関する伝承というのはこれまでのところ採録できていない。Saofa'iga 成立の伝承の中では To'afā は既成のものであった。そしてそこでは To'afā の由緒正しさというものが語られている。To'afā のうちの一称号，Ale に関しては，Malietoa 称号の成立の伝承の中でその系譜の中に織り込まれ，これが Malietoa より起源の古い称号である証拠として多くの人々の知るところとなっているのである。すなわち To'afā は，そのアチーブメントよりもアスクリプションが強調され，由緒正しさのうちにその存在の根拠が求められているのであり，*tulafale* でありながらある意味では *ali'i* 的な正統性をもっているといえよう。最初の演説を Saofa'iga に譲り，「*ali'i* の如き威厳をもって，*fa'amāepaepa*（おごそかに座る）する」というその姿は，*ali'i* 的性格を多分に有しているのである。事実 To'afā には，*tulafale* としての敬称，*tōfā* が用いられ，*tulafale* に対する挨拶，*maliu mai*（ようこそ）で呼びかけられながら，時に *tulafale ali'i*（称号名によっては *ali'i* と *tulafale* のどちらの役割もとることができるものが例外的にある。演説する役になることも，おごそかに座る役も，どちらも自らの自由で選択可能）であると称している。また称号就任式の際にも，*ali'i* の就任式の特徴である *'ie toga*（細編みござ）の分配を行なうのである [山本・山本　1981: 144–148]。また，はっきりした主従関係をもたないことも *tulafale* らしくない印といえる。

以上の如く To'afā は *ali'i* 化した *tulafale* となっているといえるが，その原因は先の伝承の解釈と同じ様に二通り考えることが可能であろう。歴史的に解釈するならば，To'afā の *tulafale* としての正統性の原理であるアチーブメントがあまりに古いものとなってくると，それが由緒正しさ，すなわちアスクリプションに転化していくのである。しかし *tulafale* がいくら *ali'i* 化しても *ali'i* となることはできないから，中途半端な To'afā は「威厳を示す *tulafale*」として結局実務より疎外され，実権を Saofa'iga に譲る結果となってしまったのである。一方，この To'afā の *ali'i* 化は，To'afā と Saofa'iga の権力争いの結果と考えることもできよう。*tulafale* としての実権は Saofa'iga が掌中におさめてしまったので，争いに破れた To'afā はやむを得ず，「名誉」に救いを求めざるを得なかったのである。いずれの解釈に従うとしても，To'afā と Saofa'iga の間の葛藤がこのように様々な形で現れてきているといえよう。

Ⅶ. おわりに

未だ不明な点も多いが，これまで集めることのできた情報をもとに，ファレアタの

地縁組織のなりたちを詳細に記述し，分析してみた。第Ⅱ，Ⅲ章を通じて公式な場面で表明されるファレアタの主要称号の関係について記述し，さらに第Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ章で各称号の系譜や伝承について考察してみた。これらの称号間の関係をとらえるのに，トンガ社会において可能だったような一元的な統合原理を見出すことを我々は断念しなくてはならない。ファレアタがファレアタという地縁集団としてまとまっているのは，トゥアマサガの中の *itū'au* という役割で他から区切られているからであり，またこの *itū'au* は Malietoa の弟 Tuna により形成されたところである。しかし Tuna の家系はもはやファレアタには存在しておらず，かわりにファレアタに「君臨」しているのは，Faumuinā, Matai'a, Seiuli という3称号の高位 *ali'i* であるが，彼らは成立の時期や経緯もまちまちであり，称号の起源としての系譜的よりどころも異なっている。ファレアタの高位 *ali'i* たちは互いに異質な権威を背後にひかえながら，ひとつの地縁組織の中に同居しているのである。*ali'i* と *tulafale* の対の関係にしても，それらの結びつき方は一様でない。Seiuli と Ulugia のように姻戚関係で結びつくものもあれば，Matai'a と To'afā のように親族関係を辿ることのできないものもある。このように称号名相互の関係は様々であり，これらの結びつきは互いの矛盾を内に含みつつ，また含むがゆえに，サモアの称号システムは演説によってその場その場で再生される *tulafale* たちの手仕事（ブリコラージュ）のようなものである[28)]。

サモアの政治構造のいくつかの特徴がファレアタの称号システムを描写する中で明らかになったはずである。まず第一に称号の序列が多分に象徴的対立の原理に基づいていることである。*fono* の際の席次はまさにその事実をよく表現している。右と左の両方に *tala* があり，どちらも上座である。ファレアタにおいて Faumuinā, Matai'a, Seiuli の間で Faumuinā が最高位であるという意見もないわけではないが，すべて同格であると主張する声もある。しかしこれらの間に順位があるか，等位であるかは，さほど問題ではない。ほぼ同格の等しい称号が互いに対峙しているということが重要である。*tulafale* 同士の場合，ただ座って地縁集団の部分を代表するのではなく，*ali'i* によって代表されたそれらの部分を接合する仕事ゆえ，役割分担ということを通じて順位が顕在化しやすい。しかしそれにもかかわらず，ファレアタの場合には実務と名誉の分離を通じて To'afā と Saofa'iga の2つの *tulafale* 団がねじれた位相の上で対峙しているのである。

このように中心性をもたずに多元的な象徴的対立の上に成立しているのがサモアの地縁組織であるが，これがさらに上のレベルに代表者，もしくは代理人をおくる際に

28) 脚注 2) 参照。

は，象徴的対立を忘れたかの如くに一見奇妙な互換性の原理が働く。ファレアタであれば *ali'i* なら三大 *ali'i* のうち誰でもが，*tulafale* なら三大 *tulafale* 団のうち誰でもが代表者となり得て，代表者となった人はあたかもファレアタの唯ひとりの権威者の如くふるまう。例えば *fono* 召集について高位 *ali'i* 称号の面々は互いに相談することによって決めるのではなく，個々の称号保持者が必要と思った時召集を単独で決めることができる。またトゥアマサガの *fono* において，ファレアタの代表として出席する場合は，三大 *tulafale* 団の代表者なら誰でも，また場合によっては3人の *ali'i* も含め，彼らのうち誰でもが代表者として演説し得るのである。称号分裂の生じている称号名についても同様で，*fono* においてはひとりがあたかも単独の称号保持者の如くふるまう。称号分裂は分身の術のようなもので，限りある権力を複数に分けて成立させるのではなく，相似的な権力をいくつもつくり出してしまうのである。

同じく，中心性のないサモアの政治構造において，常にそうとは限らないが，権威の根拠は地縁組織の内部ではなく外部にあることが多いということも指摘できる。というのもすべてにとって権威となっているものを内部にみつけるということが困難である場合がほとんどだからである。本稿で検討する機会はなかったが，いくつかの称号の起源伝説を調べてみると，Tuimanu'a（マヌア諸島[29]の王）や，Tuifiti（フィジー王），Tuitoga（トンガ王），Nafanua（サヴァイイ島の戦いの女神）に出自を辿ったり，命名されているものがけっこう多い。また第Ⅵ章で詳しく検討した Tafa'igata も，外部からの権威ではないが少なくとも地縁組織の内部からは超越していることが指摘できるのである。

このようにファレアタは，中心性を欠きながらも，*ali'i* 間，*tulafale* 間，また *ali'i*/*tulafale* 間の多元的な象徴的対立の上に，異質な権威をたばねつつ，複雑に構成された小宇宙である。このような地縁組織の秩序は，村といった狭い地域から始まってサモア全体を含みこむ最大限の拡がりに至るまでの様々なレベルにおいて固有に実現されている。確かに上位，下位のレベル間の関連づけは存在するが，むしろ一元的原理を欠くが故に，トンガにおけるのとは違って，それらは相対的な独立を保っているということができる。まさにこのような組織上の特性の故にこそ，サモアの首長制は，ポリネシアの伝統的政治システムの中でもユニークな存在となっているのである。[30]

29）サモア諸島東端の小島群。西サモア及びトゥトゥイラ島の政治組織には属さない。図1参照。

30）この意味で，M. Mead の批判として最近話題を集めた Freeman 著 *Margaret Mead and Samoa* の，少なくとも首長システムに関する分析を筆者は認めない。サモアの首長システムを他のポリネシア社会のそれと根本的に変わらないものとしてとらえる彼の基本的論点 [Freeman 1964], [Freeman 1983: 131–140]は，表面的な「事実」の整合性にもかかわらず，サモア社会の本質をとらえ得ていない。

文　　献

CONGREGATION CHRISTIAN CHURCH OF SAMOA
1978 *O le Tusi Fa'alupega o Samoa.* Apia: Malua Printing Press. (First Edition in 1940s)
FREEMAN, J. D.
1964 Some observations on kinship and political authority in Samoa. *American Anthropologist* 66: 553–568.
1983 *Margaret Mead and Samoa.* Harvard University Press.
HENRY, F.
1979 *History of Samoa.* Apia: Commercial Printers Ltd.
KRÄMER, A. F.
1902 *Die Samoa-Inseln: Entwurf einer Monographie mit besonderer Berücksichtigung Deutsch-Samoas.* Band 1, Stuttgart: Schweizerbartsche Verlag.
MARCUS, George E.
1980 *The Nobility and the Chiefly Tradition in the Modern Kingdom of Tonga.* The Polynesian Society, Memoir no. 42.
SAHLINS, M. D.
1958 *Social Stratification in Polynesia.* University of Washington Press.
STUEBEL, J. B.
1897 *Samoanische Texte.* Berlin.
山本　泰・山本真鳥
1981 「消費の禁止／性の禁止(1)——サモア社会における交換システムの構造——」『東京大学新聞研究所紀要』29: 67–186。